

奥井 复太郎（おくい ふくたろう）

明治30（1897）年、奥井福吉の2男として、東京市下谷区（当時）に生まれ、明治43（1910）年4月慶應義塾普通部入学。大正9年3月同大学理財科卒業まで、生粹の慶應マンであり、江戸っ子、卒業後直ちに大学助手、大正13年海外留学生として、独・英・仏に2年滞在して昭和2年帰国教授となり、この年始めて「都市問題」「社会政策」の講義を担当する。経済学から社会学を背景にした研究へと関心が進む。

昭和15年、代表的著書として、今日でも評価される「現代大都市論」（有斐閣）を公にするまで、三田評論・三田学会雑誌・都市問題（東京市政調査会）等の雑誌に多数の論文を寄稿、その大多数は大都市社会の研究であった。戦時中一時講義が中止されるが戦後、昭和22年に経済学部で「社会学」「国土計画論」を講義し、2年後には「都市問題」の講座も担当する。

昭和28年4月、日本都市学会の再建に参加し初代の会長となり、死去まで在任する。昭和31（1956）年学長となり、2年後には、ハーバード大学と提携実現のために渡米、同時に慶應義塾創立百年記念祭を統括する。

その後、国の産業計画会議、国民生活向上対策審議会等の委員となり、昭和37年には、政府の設置した「国民生活研究所長」を兼ね、ユネスコ国内委員会委員としても活躍する。昭和40（1965）年2月逝去。

経済学から社会学へそして都市問題を関心の中心とし

磯村 英一
(東京都立大・東洋大名誉教授)

たことから、晩年の研究業績は、「現代大都市論」が代表するように、都市問題・都市政策のあらゆる部門、専門と接触する。日本都市学会が追憶の記念出版として刊行した「都市の精神」（日本放送出版会刊昭和50年）の序文で、2代目の学会長になった故中沢誠一郎（建築学）は、奥井教授こそ日本の都市研究の礎石を築いたもの

と述べている。それは、「都市研究は、それぞれ専門の研究の分野で扱われるが、都市問題は、あらゆる社会現象の集積である。教授のような多方面の知識を駆使することではじめて成果があがる」と述べているのをみても判る。具体的には、奥井会長の下に都市学会が名古屋・浜松・高知・鎌倉等の総合調査を実施したときは、石川栄耀・高山英華（以上都市工学）、木内信藏・藤岡謙二郎（以上都市地理学）、大道安次郎・米林富男（以上社会学）が参加している。これらの調査報告は、いずれも日本の都市研究の成果として評価されている。その業績を記念して、学会は「奥井会長記念賞」を設け、優れた都市研究を表彰している。

最後に、教授が生粹の下町っ子だったことが、その業績に強く反映していることは注目される。

